

ウズベキスタン共和国

Republic of Uzbekistan

ウズベキスタンは旧ソ連中央アジアの中央部に位置し、5カ国中最大の人口を擁する。寒暖の差が激しい大陸性気候で、国土の大半をキジルクム砂漠が占める。経済は大規模灌漑による綿花栽培およびその関連産業を特色とし、綿花の生産量は世界第6位（2006年）を誇る。また、金属（特に金 / 2005年推計で生産高90t）、石油、天然ガス等の地下資源にも恵まれており、天然ガス生産はロシア、トルクメニスタンに次いで全ソ連の生産の5.0%（1990年）を占めていた。

ウズベキスタンの風土を一言で表現するならば、“シルクロードの国”とするのが的確であろう。現在の領域にはサマルカンド、ブハラ、ヒワ、コーカンドなど、古来、東西交易の要衝として栄えた都市が数多く存在する。19世紀後半、同地域を支配下に置いたロシア帝国はトルキスタン省を設立、タシケントを省都とし、綿花栽培を中心とする植民地経営を行った。

革命後の1924年、ソ連中央が行った中央アジア民族境界画定により、現在の国境線のもとにウズベク・ソヴィエト社会主義共和国が連邦構成共和国として設立された。ソ連治政下では綿花生産に一層の力が注がれ、大規模灌漑事業により収量・播種面積ともに著しく増大した。しかし、工業は天然ガスをはじめとする地下資源開発と、原綿収穫機製造、化学肥料工業など綿花関連分野のみの限定的な発展に留まり、結果、産業構造は現在に至る後進性を負うこととなる。

1980年代後半に始まるソ連解体の過程の中でウズベキスタンは1990年6月に共和国主権宣言、翌1991年、モスクワのクーデター未遂事件直後の8月31日に独立宣言を行い、国名を現行のものに改めた。同年末のソ連崩壊を経て実質的な独立国となり、1992年12月8日に初の憲法を制定する。

独立後のウズベキスタンは、政治・経済両面にわたって強力な国家の指導体制を維持している。ウズベキスタン政府は機構・人事両面で独立来、CIS諸国では異例の安定を保っており、その硬直的なまでに安定した体制を強力な指導力をもって率いているのが旧共和国共産党中央委員会第一書記のイスラム・カリモフ大統領である。直近の2007年12月の大統領選では88.1%という圧倒的得票により再選を果たした。なお、当初5年であった大統領任期は、2002年初の憲法改正により7年に延

長されている。

大統領の権力基盤が盤石である一方で、ウズベキスタンでは既にソ連末期より地政学的条件による政治リスクの高さが指摘されてきた。人口が稠密かつ宗教的伝統を比較的強く保持するフェルガナ盆地を国内に擁し、またアフガニスタン、タジキスタン（独立～1997年まで内戦を経験）等の紛争多発地域と国境を接しているためである。紛争の流入と国内における不安醸成を警戒する政府は、宗教過激派をはじめとする反政府勢力を厳しく弾圧、国際社会、特に欧米諸国からしばしば非民主的との批判を受けた。カリモフ政権に対する西側の批判は、9.11後、ウズベキスタンが対テロ軍事行動に積極的な協力方針をとったことから一時弱まる。しかし2005年5月、フェルガナで勃発した大規模な反政府暴動に対し、政府は武力による鎮圧を強行（アンディジャン事件）、欧米がこれを強く非難し、両者の間には深刻な亀裂が生じた。他方、ロシア・中国との間では政経両面において関係強化が進み、良好な関係にある。

政治同様、経済の面でもウズベキスタンは自由化・市場経済化において、政府の管理を強く維持したままでの“漸進改革”を標榜している。IMF型の急進的市場経済化を否定するため国際的評価は低いが、いわゆるシステム・ショックが抑制されることから経済の安定を維持する面では効果が高く、連邦崩壊直後の90年代前半、他のCIS諸国が軒並み生産を半減させるなか、ウズベキスタンのGDP低下は独立前の20%以内にとどまった。しかし、低下は最小限にとどめたものの、自由化の遅れた経済体制は成長力に乏しく、近年はカザフスタンら近隣の資源国の急成長ぶりに大きく水をあけられている。2006年の国民1人当たりGNIはロシアの5,770ドル、カザフスタンの3,870ドルに対してウズベキスタンはわずか510ドルにとどまった。格差を反映し、近年はウズベキスタンからこれら諸国への出稼ぎが盛んとなっている。出稼ぎ送金の増加と、主力輸出品の金・炭化水素資源の国際価格高騰により、ウズベキスタン経済は過去4年にわたり7%を超える高成長を記録した。ただし、こうした外的好要因による現行の成長を長期的発展につなげるには、自由化・市場化の推進による国内産業活性化が必要であることは言うまでもない。

『ウズベキスタン共和国基礎情報』

正式国名：ウズベキスタン共和国（Republic of Uzbekistan）

首都：タシケント（Tashkent / Toshkent）

国土面積：44万8,900 km²

日本との時差：-4時間（サマータイムなし）

人口（2007年初）：2,670万人（人口密度、59.5人 / km²）

主要都市とその人口（2004年）：タシケント（215万人）、ナマンガン（41万人）、サマルカンド（36万人）、アンディジャン（35万人）、ヌクス（26万人）、ブハラ（24万人）など。

民族構成（1998年初）：ウズベク人（77.2%）、ロシア人（5.2%）、タジク人（4.8%）、カザフ人（4.0%）、カラカルパク人（2.1%）、タタール人（1.4%）、キルギス人（0.9%）、トルクメン人（0.6%）等。

言語：憲法および「国家言語法」でウズベク語を国家言語と定める。

宗教：イスラム教（88%、主にスンニ派）、他にロシア正教等。

憲法：1992年12月8日採択、1993年12月および2002年1月改正。

大統領：I. カリモフ（KARIMOV, Islam Abduganiyevich）、1938年生まれ。1990年3月に最高会議で大統領に選出、同年12月初の直接選挙によって大統領に再選。1995年3月、国民投票で任期延長、2000年1月の大統領選で再選。2002年1月の憲法改正により大統領任期は5年から7年に延長。2007年12月の大統領選で88.1%の得票により再び再選され、2008年1月就任。現在に至る。

首相：Sh.ミルジヨエフ（MIRZIYOYEV, Shavkat Miromonovich）、1957年生まれ。2003年12月から現職。2005年1月再任。

議会：2004年12月～2005年1月の選挙で二院制の新議会を選出。上院は地域政府による選出と大統領任命で計100議席、下院は国民の直接選挙で120議席。いずれも任期5年。

GNI（2006年、世銀）：161億7,900万ドル。

国民1人当たりGNI（2006年、世銀）：610ドル。

通貨：スム（Sum）。1994年6月導入。2008年9月上旬現在、1ドル=1,324スム。

外貨準備高（2006年末、EBRD推計、金を除く）：46億6,500万ドル。

対外債務残高（2006年、EBRD推計）：38億7,200万ドル。

ドル換算の平均月額賃金（2005年1～9月）：81ドル。

国防費の対GDP比（2005年）：0.5%。

主要産業：農業（綿花・果物）、石油・天然ガス・金等地下資源採掘。

主要輸出品：綿花、天然ガス、金・非鉄金属。